

Title	ロシア語における主体の弱化と「場所」中心の表現
Sub Title	The weakening of subject and the expression of place in the Russian language
Author	朝妻, 恵里子(Asazuma, Eriko) Golovina, Ksenia
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Keio University Hiyoshi review. Language, culture and communication). No.52 (2020.), p.1- 11
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20201231-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ロシア語における主体の弱化と「場所」中心の表現

朝妻恵里子, ゴロウィナ・クセーニヤ

はじめに

ロシア語は典型的に BE 言語に属する¹⁾。BE 言語の特徴の一つとして状況・場所を重視することが挙げられる。これは対概念である HAVE 言語が人間主体を重視して言語化するのに対して、BE 言語では主体よりも話されている状況やプロセスに焦点を当てて言語化を行う傾向が強いことを指している。以下では、BE 言語のこの特徴をロシア語の無人称文、y + 生格の構文、ся 動詞などに見いだし、ロシア語が格階層を用いたり、再帰動詞を用いたりすることで主体の存在を弱め、状況や場所の視点から言語化する述語中心型の言語であることを明らかにする。ロシア語のように印欧語族の屈折のある言語に関しては、主語や主体が文の中心となり、それが文全体の構造を決めるかのような主語中心型の言語分析が主流であったが、「場所」という視点から分析することで、無人称文や ся 動詞における主体の弱化、述語の前面化の説明がつくだろう。

1. BE 言語とは

言語には一般に「～には…がある」という「存在」を表す表現と、「～は…を持っている」という「所有」を表す表現があり、この二つの表現方法がさまざまな状況を言い表す用法に拡張している。「存在」表現の形式が「所有」表現にまで及んでいる言語は BE 言語、逆に「所有」表現の形式が「存在」表現に用いられている言語は HAVE 言語と呼ばれている。

1a) 私には 2 人の子どもがいる。(池上 2006: 161)

1b) I have two children.

2a) この部屋には窓が二つある。

2b) This room has two windows.

1) 朝妻, ゴロウィナ 2016 を参照のこと。

日本語では 1a) のように本来「所有」の表現を用いるべきところを「存在」の意味の「いる」で、英語では 2b) のように本来「存在」の表現を用いるべきところを「所有」の have で表現しており、このことから日本語は BE 言語、英語は HAVE 言語と区別されている。

この類型に従うと、ロシア語はイサチェンコ (Issatchenko 1974) によって典型的な BE 言語とされている。先の例文にロシア語を当てはめると、ロシア語では次のように「存在」を表す есть 「～がある」で表現される。

1c) У меня есть двое детей. (*Я имею двоих детей.)

2c) В этой комнате есть два окна. (*Эта комната имеет два окна.)

歴史的にスラヴ祖語には「持つ」にあたる動詞は存在せず、現代ロシア語において使われている「持つ」にあたる иметь という動詞はギリシャ語からの翻訳借用語で、学術論文や法的書類など特別な文体でのみ用いられ、普通は「空間」を表す前置詞 у と、「存在」を表す述語 есть を用いて「所有」を表現する。この「前置詞 у + 生格」の構文は歴史的にはもともと「場所」を表し、「所有」の意味は二次的に派生した。現代ロシア語ではこの構文には「場所」と「所有」の意味が共存しているとされ (Жихарева 1966: 232)、ロシア語はまさしく BE 言語といえる。

こうした BE 言語の特徴としては、発話の状況に依存する言語であり、主体はその状況のなかに埋没し、省略されやすいこと、目的語を取らない自動詞表現を好むことなどが挙げられる。HAVE 言語のほうは、人間中心の言語表現を好み、主体や主語の存在は絶対的で文頭に必ず標示され、他動詞表現を好むことなどが指摘されている。以下では、ロシア語において状況や場に依拠した表現がいかに好まれるかを示し、その際に現れる主体の弱化や述語を中心とした文構造に着目する。

2. 無人称文にみられる述語・状況の前面化

ロシア語では無人称文という主語のない文が多用される。

3a) В Москве холодно. 「モスクワは寒いです。」

3b) It is cold in Moscow.

4a) Мне холодно. 「私は寒い。」

4b) I'm cold.

5a) Мне скучно. 「私は退屈です。」

5b) I'm bored.

6a) Мне трудно говорить по-русски. 「私はロシア語を話すのが難しいです。」

6b) It is difficult for me to speak Russian.

例文 3a) は文字どおり訳すと「モスクワにおいては寒い」となり、場所を表す前置格 + 述語

という文構造になっている²⁾。同じように 4a) も主格はなく、意味上の主体である「私」は与格で標示される。英語であれば、*In Moscow is cold. というように場所に焦点をあてて言語化することはできず、it という形式主語をたてて、主語を必ず明示する主語中心型であるが、ロシア語は主語なしで述語を置くことが可能な述語中心型の言語といえる³⁾。ロシア語の捉えかたでは、場所が寒いのであり、主体の「私」は寒いという状況全体を感じているにすぎないのだから、人が主語として立つことは不可能であり、格変化のあるロシア語では主格を用いずに与格や前置格などの斜格で主体を表すことで、主体の存在を弱め、状況や場所が前面に出される。

例文 5) も同じ主格のない無人称文であり、意味上の主語は与格で表示されている。この場合も述語 *скучно* が文の中心となり、主体の「私」は与格で後退している。後退しているのは、「私」という存在が退屈であるのではなく、「私」を取り囲む状況が退屈を作っていることを表しているためである。やはり状況や場所の視点から言語化されている。英語と対比すると、他動詞 *bore* から派生した受動態文であり、主語の I の形式は後退するどころか前面に出されている。

ロシア語と同じ BE 言語である日本語とはいえば、「私は寒いです」「私は退屈です」というように主体の「私」を入れると不自然に響き、「寒いね」とか「退屈だな」という述語のみで表されるのが自然である。ここでは意味上の主体が状況・場のなかに埋没し、さらにはそれを言語化せずに主語ゼロ表記が普通の日本語の特徴があらわれている。

例文 6) も同様であって、英語ではここでも形式主語を立て、いわゆる it...to 構文をとる。ロシア語では意味上の主体は与格で格下げされ、「私にとっては」の意味になる。この点は英語の *for me* と同じであるが、ロシア語では無主語文で、述語 + 不定形動詞が文の骨組みとなり、状況を中心に据えた文構造となっている。

このように主格から格下げされた格が表すものは、主体自身に限らず、主体とその状況・場所が一体化した全体であるといえる。述語中心型の言語はその場面との関係において言語化を行い、その際に格階層を利用して主体とその状況の関係を表している。

ロシア語では主格で表示する主体表現ばかりでなく、主体を与格や前置格などで弱める表現が多い。このときの弱められた主体は場所や状況に依存し、そこに埋没された形で表現されているのである。英語をはじめとする HAVE 言語では主体は場所とは独立した形で表される。

ロシア語では主体を示す際に、主格 > 与格 > 生格 > 造格 (Зализняк and Левонтина 2005: 325) という格階層がある。与格は単独で意味上の主語の役割を果たすが、生格と造格は必ず前置詞とともに用いて意味上の主語となりうる。そのため、生格、造格標示の主体は主格や与格標示よりも一層弱まる。こうした明確な格標示によって、話し手は主体の関与度を意識的に明示することができる。

2) 英語では *Moscow is cold.* という場所を主語とした文も可能である。

3) 言語学ではかつては主語や主体を中心に捉える傾向が強かったが、HAVE 言語・BE 言語の研究や岡 (2013) のように述語を中心に捉える場所の言語の研究も現在では多い。

日本語では、格によって主体の関与度を明らかにする機能はない。むしろ主体をゼロ化することがたびたびあるため、主体という個体がつねに出来事のなかに埋没し、曖昧で、一層漠然としている。日本語とロシア語は、主体の存在のゼロ化や強弱の段階化といった文法操作が可能な言語であり、そのために多様な曖昧表現を作りだすことができるのである。

3. 場所化する主体

1) 「親しみ」を表す y + 生格

次に前置詞 y + 生格の構文が主体の弱化、述語中心型の言語表現としていかに用いられているかをみていく。前述した格階層の見解に従えば、与格標示の主体よりも y + 生格ではさらに弱化した主体が表される。y + 生格は何と言っても「所有」の意味が代表的である。冒頭で述べたように、ロシア語では「所有」の表現の際、前置詞を用いて「～に…がある」という存在表現を用いて表し、他方の英語は主語 + have + 目的語の構文を「存在」の意味にも汎用させている。y + 生格の「所有」の用法は y + 生格がそもそも「～のそばに」という「場所」を表す前置詞であることから明らかなように、「～のそばに…がある」という述語中心型の言語の特徴がもっともよく表れた用法である。

y + 生格には多様な意味があるが、「～の」という「所属」を表す意味をまずみしてみる。ロシア語で「所属」は Это книга студента, 「これは学生の本です。」のように生格単独で表すのが一般的である。y + 生格でもこれと似た意味を表すが、ここには独特のニュアンスが付与される。

7) Комната бабушки чистая. 「祖母の部屋はきれいだ」

8) Бабушкина комната чистая.

9) Комната у бабушки чистая.

これらの三つの例文はどれも自然な表現であるが、祖母 (бабушка) の部屋 (комната) への関与が例文 7) から 9) へと段階的に高まるというニュアンスの違いがある。前置詞なしで生格標示する例文 7) はもっとも中立的で、祖母と部屋の関係は「所有」の事実のみを表している。例文 8) の物主形容詞を用いた表現では部屋が祖母のものである色合いが高まり、9) の y + 生格では、部屋が祖母の影響範囲にあるニュアンスが強くなる。たとえば、部屋がきれいなのは祖母のきれい好きのおかげであるような意味が示唆される。また、所有者 (祖母) と対象 (部屋) との心的距離も 8) と 9) の方が 7) と比べて近く、対象への愛着や親しみがあることがうかがえる⁴⁾。

4) 古語のロシア語では「所有」を表す場合、物主形容詞を使うのが主流であり、例文 7) のような前置詞なしの生格が用いられることは稀であった。一方、現代ロシア語では 8) のような物主形容詞を用いた文は自然とはいえ、物主形容詞自体がわずかな語にしか残っていない (Макарова 1954)。

Собинникова (1958) や Жихарева (1966) は、y + 生格で表される特徴として、生格標示される「人 (лицо)」の影響範囲内でなされる行為を指摘している。これもやはり状況と主体が一体化した表現である。「誰々のところにある……」という「人」の目線からの状況設定が文構造となっている。そもそも「場所」を表す前置詞 y が「人」(活動体) と結びつくことによって、「人」が持っていた愛着などのニュアンスが「場所」に付与され、ただの空間表現ではなくなる。場所・状況に依拠した構文が得意なロシア語独特な表現であるといえる。

2) 主体の関わり

こうした場所の表現から派生した y + 生格の「所有」表現も、単に「持ちもの」を表すだけでなく、人の関わりのニュアンスが含まれることがある。ある状況や場に関わっている人を表したいとき、すなわち「関わり」のある主体⁵⁾を表現したいとき、y + 生格で標示される。これにより、状況や場があたかもその人の手中でなされているかのようなニュアンスを帯びる(Кокорина и др. 1985: 29)。

10a) У коллеги сейчас совещание. 「同僚はいま会議中だ。」

10b) My colleague is having a meeting now.

例文 10a) の文構造は、「同僚」が「会議」に関わっている主体であるが、主体の「同僚」は生格標示され、「会議」が主格であり主語である。文字通りに訳せば「同僚のところでは会議がある」となる。意味的な主体は「同僚」であるのに、文法的には「会議」が主語となっている。このように y + 生格の構文では、意味上の主体が生格標示されることにより格下げされ、主格表示の「所有物」に焦点が当たる。意味的にはその「所有物」と関わりのある人としての主体が表されており、例文 10b) の英語のような主語の「所有者」とその「所有物」という明白な主従関係ではなく、あくまで関わりを示しているに過ぎない。

こうした y + 生格の場所に依拠した表現のもたらす主体の曖昧化がより顕著に表れる例がある。実際の動作主が誰かという点が曖昧になり、より広い意味で y + 生格が用いられるケースである。

11) У меня занятие.

12) У нас концерт.

Шелякин (2000: 247) によれば、例文 11) と 12) では、「私」が授業を行うのか、「私」は授業を受けるのか、あるいは「私たち」がコンサートを開くのか、「私たち」はコンサートを聴きに行くのか両方の意味の可能性がある。生格標示された人がみずから主体となっているのか、あるいはただ参加しているだけなのか、両方の意味で用いられる。つまり、y + 生格は

5) Метс (2014) は y + 生格の構文に関して、たとえば У меня болит голова. 「私は頭が痛い」のように、意味上の主体である私 (меня), 主語の頭 (голова) という二つの構成要素からなる「統語上の非対称」が起きていると説明している。

実際の行動の担い手を表さずに、主体の関わりを表す表現なのである。英語の場合も、I have a lecture と聞けば、講義をするのと講義を受けるのと双方の意味にとれるが、ロシア語よりも英語のほうが主格 I の主体性、動作主の意味合いが強く、講義をする担い手を想定されることのほうが多いだろう。主格 I で示される英語と比べて、ロシア語の y + 生格では、主体が著しく弱化している。前置詞付きかつ斜格の生格という格関係においては、主体の意味は薄れ、より曖昧な意味になる。

指示対象がさらに一層曖昧化しているのが次の表現である。

13) У неё операция⁶⁾. 「彼女は手術をうけます。」

14) У друга будет вечеринка. 「友人のところでパーティがあります。」

例文 13) の場合、無理に直訳をすれば、「彼女のもとでは手術がある」となるが、「彼女のもとでは」が実際に意味する場所は「病院」である。主体とその活動範囲が一体化し、「人」で「場所」を表す表現になっている。この文脈では「彼女」と関わりのある「病院」までを暗に意味し、y + 生格表現が「人」を示しながらも「場所」を表すことのできる汎用性の高さと、それがもたらす意味の曖昧性を有していることがわかる。例文 14) の「友人のところでパーティがある」においても意味上の主体が「場所」と混然一体となり、主体が場所化している。

3) 場の共有者

次の例文に関しても似た解釈がなされる。

15) Студент профессора Иванова поступил в Гарвард. イヴァノフ教授の学生がハーヴァードに入った。

16) У профессора Иванова студент поступил в Гарвард.

前置詞なしの生格表現の 15) と前置詞 y + 生格表現の 16) と違いについて、パードウチュエヴァは「所有される人の自立的役割 vs. 依存的役割」と端的に述べている (Paducheva 2004, Гращенков 2007 で引用)。また、16) の方が、教授イヴァノフの学生への関与、親しみが強調されると同時に、伝えられる事実に対する感情の高まりが表される。これに関しても前置詞 y が場所を表す語であることから、場を共有している身内の意味合いが加わる。

y + 生格のこうした特徴がより顕著に表れている例を示したい。

17) Смотри у меня! 「ほら見たことか。」

18) Будешь знать у меня! 「言ったことでしょう!」

19) Какой ты у меня хорошенький! 「なんてあなたはかわいいの。」

例文 17) ～ 19) は「私」の関わる範囲内にいる親しい相手に対して、くだけた脅しや褒め

6) このように、y + 生格で受け身の意味が生じることも興味深い。ちなみにこの文でも「手術をする人」の意味を持つ場合もあるが、かなり限定的な文脈においてのみであり、ほとんどが「手術を受ける人」の意味になる。

言葉となっている。どれも身内か同じ組織などに属する仲間関係にのみ用いられる表現であり、近い関係にない他人に対しては用いられない。それぞれを無理に直訳してみれば 17) 「私のところから見てみなさい!」、18) 「私のところではわかるでしょう」、19) 「私のあなたはなんてかわいいの!」となる。聞き手に対し、「私」(話し手)の存在が取り込まれ、「私」と聞き手が一体となっている場がイメージされる。y + 生格において生格標示された「人」と聞き手が同じ場所に立って同じもの・ことを見ているという表現形式で、慣用化している⁷⁾。

また、y + 生格の表現以外にも、こうした話し手と聞き手(あるいは第三者)とが一体となった表現として以下のような言い回しも非常に多用される。

20) Мы с женой ездили на дачу. 「私と妻は別荘に出かけた。」

21) Мы с братом вкусно пообедали. 「私と兄はおいしく食事をおえた。」

英語であれば My wife and I, 日本語であれば「私と妻」という言いかたをするところ、ロシア語では直訳すれば「妻とともに私たち」という言いかたで, мы「私たち」という一人称複数で聞き手や第三者を含めて表現する。жена и я「妻と私」, брат и я「兄と私」と表現することも文法的には不可能ではないが、ほとんど用いられない。用いられるとすると同じ場を共有した同じ動作の動作主であるというニュアンスは薄れる。

22) Жена и я не согласны по этому поводу. 「妻と私はこれに関しては意見が異なる。」

23) Брат и я были в разных командировках. 「兄と私は別々のところへ出張に行った。」

こうした点からもロシア語においては主体よりもまず状況・場が先にあり、そこへの関わりかたに応じて主体表現が選別されるという特徴がうかがえる。

4) y + 場所 → y + 人 → y + 場所

以上のように、原義は「場所」を表していた y + 生格(不活動体)の構文が y + 生格(活動体)に汎用され、多様な意味をもった例を見てきたが、y + 生格(不活動体)の表現がメタファー的に「所有」の意味で用いられる用法もある。

24a) У этой церкви голубой купол. 「この教会は青い円屋根がある。」

24b) Купол этой церкви – голубой.

25a) У этого государства строгий закон. 「この国は厳しい法を有している。」

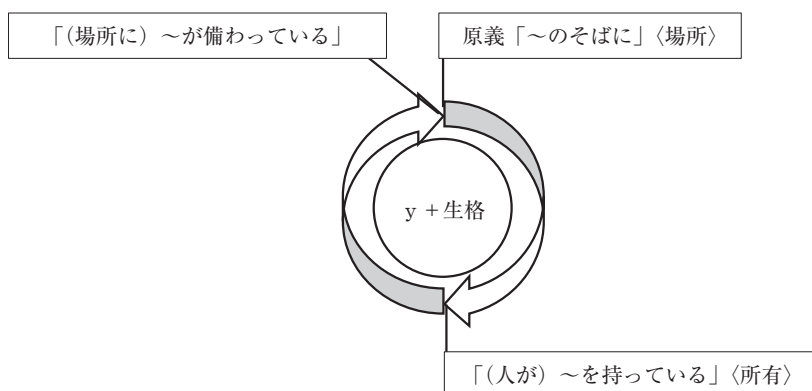
25b) Закон этого государства – строгий.

例文 24b) と 25b) になると事務的で硬い文体になるが、y を用いた 24a) と 25a) では口語的で親しみがあがり、教会や国をあたかも人のように捉えている。もともと「空間・場所」の意

7) Hosking (2001: 17, Morgunova 2006 で引用) は、ロシア語の у нас 「我々のところでは」という独特な表現は感情に訴えるものとして使われる頻率が高いことを指摘している。ロシア人による内と外の二項対立における「内」を意識させるものであるが、日本文化論でたびたび指摘される内と外の見解に匹敵し、日本語の若者言葉でも「うちら」という表現が多用されているのと似ている。

味であった y + 生格が「所有」の意味に拡張したのであるが、この所有表現において古東スラヴ語では生格標示される所有者は必ず活動体であった (McAnnalen 2011)。一方、現代ロシア語では不活動体にも「所有者」の意味合いが拡張されるケースが多く見うけられる。こうした拡張は物を人にたとえるメタファーに基づく。例文 24a) と 25a) では церковь「教会」や государство「国家」というなじみ深いものを「人」として認識し、心的距離の近さや親しみを表している。前述した y + 生格の主体の関わりを表す性質である。この性質と結びついて、人にたとえやすい身近なものに対しては親しみを表すために y + 生格が不活動体にも用いられることが増えたと考えられる。要するに、 y + 生格は原義の「空間・場所」の意味の「～のそばに」から出発し、そこから「誰々が何々を持っている」という「所有」の意味を得、 y + 人 (活動体) という新たな形式を主要な用法として定着させた。そこから「どこどこに何々がある」という y + 不活動体の表現に再び戻ってきたが、原義の「～のそばに」という単なる空間表現とは異なり、「なじみ深いどこどこには……という性質が備わっている」という「場所」を「人」にたとえたメタファー的表現となっており、もともとの「空間・場所」の意味とはニュアンスの異なる新たな意味を生成している。述語中心で主体がゼロ化している場所表現は、主語中心の表現と比べると意味の曖昧性も伴うことが多いが (例文 11, 12), その反面メタファー展開しやすく新たな意味を作る生成力が強いといえる。

ちなみにたとえば в や на, к, по といった多くの前置詞はもともと空間を表す前置詞であったが、メタファーに基づいて時間表現にも意味が拡張している。в этом году「今年」、на этой неделе「今週」、к утру「朝までに」、по вечерам「夜ごと」などのように空間の前置詞は時間的な意味に必ず拡張している。しかし、Пешковский (1956: 311) による指摘もあるが、前置詞 y は空間表現が原義であるにもかかわらず、こうした時間表現への拡張はほとんどみられない。これは前置詞 y が主体表現の多くを担うようになり、「人」との結びつきがあまりに強く、時間表現にまで拡張できなかったのではないかと推測する。



4. ся 動詞：自然のなりゆき、状況依存の表現

最後に動詞の要求で主体の格下げがなされるケースをみる。これは状況のせいで自然と事態がそうってしまったというニュアンスを付与する表現で、ロシア語では非常によく見られる。

26a) Мне не хочется работать. 「私は働きたくない気がする。」

26b) Я не хочу работать. 「私は働きたくない。」

例文 26b) のように主格を用いてより直接的に表現することも可能だが、26a) のように無人称文を用いて主体を与格に格下げた表現にすると、本人の意志とは離れたところで、無意識的に「働きたくない気がする」といった婉曲的なニュアンスが加わる。主体の積極的な意志というよりも、主体を取り囲む環境が「働きたくない」という状況を作り上げたかのような印象を与える、場所中心的な言い回しである。ベルジチェフスキイらは、ロシア人がこうした無人称文を好むのは、ロシア民族のもつ運命論的、非合理主義的といった特有のメンタリティが文法に影響しているからだと指摘している (Бердичевский 2011: 49)⁸⁾。この指摘が正しいかどうかは議論しないが、同じような指摘はほかでもある。ザリズニャクとレヴォンチナ (2005) もやはりこの言語的性質をロシア人の「民族的特徴」とまで述べ、動詞分析を行っている⁹⁾。

27) Мне не удалось купить билеты. 「チケットを（頑張ったが）買えなかった。」

28) У меня не получилось купить билеты. 「チケットを買えないことになってしまった。」

29) У меня не сложилось купить билеты. 「チケットを買えないことになってしまった。」

例文 27) の удаться 「成功する」は近年、おもに口語において使用頻度の高い動詞である。直訳すれば「(主体) には～することに成功しなかった」という婉曲表現であり、「買えなかった」ことの非は自分になことを示唆している。この動詞も主格を用いず、意味上の主語を与格で標示する無人称動詞である。28), 29) も「買えなかった」のは自然の成り行きであるか

8) こうした曖昧性をともなった婉曲表現は日本語でも好まれる。たとえば、主語を意図的に明示しないで、「～だと思われる」といった表現は一つのレトリックとして存在する。ところが、ヨーロッパ言語の話者にとっては、ロシア語のこうした無人称文に違和感を抱くという指摘がある。オーストリア人がロシア人に「ディスコに行かない？」と誘ったところ、Что-то не хочется 「なんだか行く気がしない」というロシア語の答えに戸惑いを感じたという例が先のベルジチェフスキイにある (Бердичевский 2011: 60)。

9) これによると、ロシア語には получаться をはじめとする多くの動詞 (собираться 「～するつもりである」、постараться 「頑張る」、удаться 「成功する」、успеть 「～する余裕がある」など) が、その行為が動作主の意志の及ばない範囲で行われることを意図し、あたかも自然の流れのように、状況がそうさせたというニュアンスを与える。

のような言い回しである。両文とも y + 生格であるが、これは動詞の要求によるものである。これらの例から明らかなように、伝えられる事実は、「買えなかった」という極めて単純明快な内容であるにも関わらず、ロシア語では動作主の主体性を弱化し、状況のせいにした表現である。

ся 動詞については本稿ではあまり触れないが、動作が主体に戻る再帰動詞であり、客体への働きかけはない。再帰動詞を用いるロシア語のこうした表現は能動態と受動態の間に位置する中動態にあたり、「人が何をどうする」や「人によって何がなされる」といった主体を中心とした文形成ではなく、述語（ся 動詞）を中心として状況を言語化するというロシア語の特徴のあらわれた表現である。

結論

主語や主体は言語分析において重要視されてきた指標の一つであるが、本稿では主語や主体が弱化し、後景に退いているロシア語の例を取り上げた。本稿で扱った無人称述語文や y + 生格の構文、ся 動詞以外にも、無人称動詞（Темнеет. 「暗くなっていく。」 Меня рвало. 「血を吐いた。」 Её убило молнией. 「彼は落雷で死んだ。」）をはじめとして、ロシア語には主語がゼロ化している表現がほかにも多くある。こうした主語や主体のゼロ化や弱化の現象を構文別に個別に扱うのではなく、統一的に分析し、ロシア語の一つの傾向、特徴として状況・場の視点から言語化することを明らかにした。ロシア語で好まれているのは、「人」を中心に表現するのではなく、状況や場所の視点から主体をそこに一体化させて言語化することであり、こうした特徴を従来の BE 言語という類型的な特徴から自立させ、新たな枠組みとして提示したい。

参考文献

- 朝妻恵里子、ゴロウィナ・クセーニヤ「BECOME 言語という類型にみられる日本語とロシア語の共通性」慶應義塾大学日吉紀要『言語・文化・コミュニケーション』（47），pp. 1-14, 2016 年。
- 池上嘉彦『「する」と「なる」の言語学』大修館書店，1981 年。
- 池上嘉彦『英語の感覚・日本語の感覚〈ことばの意味〉のしくみ』NHK ブックス，2006 年。
- 岡智之『場所の言語学』ひつじ書房，2013 年。
- Hosking G. 2001. *Russia and the Russians: A History from Rus to the Russian Federation*. Cambridge, MA: Belknap Press of Harvard University Press.
- Issatchenko, Alexander V. "On 'Have' and 'Be' Languages (A Typological Sketch), *Slavic Forum: Essays in Linguistics and Literature*, Michael S. Flier (ed.), The Hague/Paris: Mouton, 1974, pp. 43-77.
- McAnallen J. 2011. The History of Predicative Possession in Slavic: Internal Development vs. Language Contact. Doctoral thesis. University of California, Berkeley.
- Morgunova O. 2006. Europeans, not Westerners: How the Dilemma "Russia vs. the West is Represented in Russian Language Open Access Migrants' Forums (United Kingdom). *Ab Imperio* 3: 389-410.

- Paducheva E.V. 2004. Splitting of Possessor NPs and External Possessor in Russian. In J. Kim, Y.A. Lander, and B.H. Partee (eds.) *Possessives and Beyond: Semantics and Syntax*, pp. 59–86. Amherst, Mass.: GLSA, University of Massachusetts.
- Бердичевский А. Л., Гиниатуллин И. А., Лысакова И. П., Пассов Е. И. 2011. *Методика межкультурного образования средствами русского языка как иностранного*.
- Гращенков П.В. 2007. Типология посессивных конструкций. *Вопросы языкознания*. № 3. С. 25–54.
- Жихарева Н.Д. 1966. К вопросу о выражении принадлежности в истории русского языка // Ученые записки Курского педагогического института, вып. 25. *Краткие очерки по русскому языку*. № 2, – с. 227–233.
- Зализняк А.А., Левонтина И.Б. 2005. Отражение “национального характера” в лексике русского языка // *Ключевые идеи русской языковой картины мира*. А.А. Зализняк, И.Б. Левонтина, А.Д. Шмелев. М.: Языки славянской культуры.
- Кокорина С.П., Бабалова Л.Л., Метс Н.А. и др. 1985. *Практическая грамматика русского языка для зарубежных преподавателей-русистов*. Москва: Русский язык.
- Макарова С.Я. 1954. Родительный падеж принадлежности в русском языке XI–XVII вв. *Труды института языкознания*. Т. 3. Москва: Издательство АН СССР. С. 7–31.
- Метс Н.А. 2014. *Трудные аспекты русской грамматики для иностранцев*. Москва: ИКАР.
- Пешковский А.М. 1956. *Русский синтаксис в научном освещении*. Москва: Государственное учебно-педагогическое издательство Министерства просвещения РСФСР.
- Собинникова В.И. 1958. Родительный принадлежности с предлогом у в восточнославянских языках. *Славянский сборник*. II вып., филологический. Воронеж. С. 33–46.
- Шелякин М.А. 2000. *Справочник по русской грамматике*. Москва: Русский язык.